

聖書：ヨハネの黙示録 1：1～3

説教題：黙示録を読む幸い

日時：2020年10月25日（朝拝）

今日からヨハネの黙示録をともに読みたいと思います。今回、この書に挑戦しようと思った背景には主に3つのことがありました。一つは数年前に朝拝でダニエル書の講解説教をしたことです。ダニエル書とヨハネの黙示録は関係が深く、将来いつかヨハネの黙示録を説教する準備としても良いのでは？と思って取り組みましたが、黙示録に出て来る用語がたくさんダニエル書に出て来ることに驚きました。たとえばこの後、1章13～16節にキリストの姿が描かれます。13節に「人の子のような方」と出て来て、その後には足まで垂れた「衣」とか、「金の帯」とか、「頭と髪は白い羊毛のよう」とか、「目は燃える炎のよう」とか、……。実にこれらはすべてダニエル書に出ています。つまりヨハネの黙示録は旧約聖書の用語や思想を背景にして記されています。いきなり黙示録を読むと、今のような描写にぶつかってチンプンカンプンになりそうですが、今日の私たちよりもずっと旧約聖書に精通していたであろう当時の読者たちにとって、黙示録におけるこれらのヨハネの言葉はすぐにピンと来るものだったのです。対応する旧約聖書のイメージをすぐ思い起こさせるものだったのです。そして私はダニエル書の説教を通して、その続編とも言うべきヨハネの黙示録をいつか朝拝で取り上げることができたらと願っていました。

とは言っても、なかなか踏ん切りがつかないでいたところ、2つ目の理由として、マタイの福音書の説教をしている間、複数の方々から直接的また間接的にヨハネの黙示録の説教をしてほしいとの要望をいただきました。そして3つ目に今年の夏休みは新型コロナウイルス感染予防のために結果的に都外に出ませんでした、強いられたチャンスとして、すでに集めていた黙示録に関する資料を読むことに時間を用いました。その中で、やるのは今だ！という思いへ導かれたということがあります。今、聖研祈り会と夕拝では旧約聖書を取り上げていて、祈り会ではパウロ書簡からお話ししていますので、福音書の説教を終えた今、バランス的にもヨハネ文書、特に黙示録に取り組むのがちょうど良いかなと思ったこともあります。

そしてこの書に挑戦したいと思ったのは、これから見るこの書の冒頭部分、プロローグにある励ましにもよります。まず「イエス・キリストの黙示」とあります。「黙示」

とは何でしょうか。これは「隠されているものを明らかにする」という意味の言葉だそうです。イメージとしては彫刻作品を発表する際に、それを覆っていたカバー、布切れを取り去る時にたとえることができます。それによって中のものが明らかにされます。この書は隠したり、読む人を混乱させて、分からなくさせるためのものではなく、分かるためのもの、明らかにするためのものです。

またこれは「イエス・キリストの」黙示と言われています。この意味は「イエス・キリストによる黙示」ということだと思います。続くところに、神はこれをキリストに与えたと書かれています。そのキリストから与えられた啓示なのでイエス・キリストの黙示と言われている。源まで遡って「神の黙示」と言っても良いではないかという考えもあるかもしれませんが、キリストは神と人との間の仲介者、仲保者です。独特の位置を持っています。ですからその方の啓示と言うのがふさわしい。さらにこのキリストによる黙示は御使いを通してヨハネに告げられました。御使いはこの書で頻繁に出て来ます。さらにヨハネにこのことが告げられたのは、最初に書いてあるように「しもべたちに示すため」です。この「しもべたち」とは信者一般のことです。ここにも大きな励ましがあります。すなわちこの黙示録は一部のエリートのためのものではない。普通の人には理解できないものではない。これはしもべたちに示すために書かれたものです。ですから私たちは尻込みすべきではないのです。

さて、ではこの書には何が書かれているのでしょうか。1 節に「すぐに起こるべきこと」をしもべたちに示すためとあります。まずこの理解が大切です。私たちはこれを読んで何をイメージするのでしょうか。「すぐに起こること」だから、近い将来に起こること、世の終わり、終末に起こる様々な異変のことでしょうか。ある人はそのように、間もなく来るであろう世の終わりの様々な兆候を記している書として読もうとします。まるでノストラダムスの大予言を読むかのように。しかしこれはそういう意味ではないようです。

この1 節の言葉は、実は冒頭で触れたダニエル書の言葉を下敷きにしたものです。ダニエル書 2 章 28～29 節を参照したいと思います。ここはバビロン捕囚の時代、バビロンの王ネブカドネツアルが見た夢をダニエルが解き明かす場面です。ダニエルはそこで王にこう言います。2 章 28～29 節：「しかし天に秘密を明らかにするひとりの神がおられます。この方が終わりの日に起こることをネブカドネツアル王に示されたのです。あ

あなたの夢、寝床であなたの頭に浮かんだ幻は次のとおりです。王よ。あなたが寝床で思い浮かべていたのは、これから起こることです。秘密を明らかにされる方が、これから起こることをお示しになったのです。」ここに繰り返し出て来る「秘密を明らかにする」という部分の「明らかにする」という言葉が、黙示録の「黙示」に相当する言葉です。ダニエルはここで「終わりの日に起こることを神はネブカドネツアル王に示された」と言っています。29節でも「これから起こること」を神は示されたのだと言います。そしてその夢の意味を解き明かします。ダニエルはまず王が見た夢について31節以降で言い当てます。それは巨大な像の夢でした。その像は4つの部分からなっていて、第一に頭は純金、第二に胸と両腕は銀、第三に腹とももは青銅、第四にすねは鉄、足は一部が鉄、一部が粘土というものでした。ダニエルは36節以降で、これは世界の歴史に次々に現れる王国を指していると言います。頭はこの時の世界の支配者バビロンで、それは純金で表されています。それ以降の3つの国は、この後のことですので、具体的な国名は言われていませんが、一般的にはその後起こったメド・ペルシャ、ギリシャ、ローマ帝国を指すものだったと解されています。しかしこの夢のクライマックスは34節以降にあります。34節に、王が見ていると一つの石が人手によらずに切り出され、巨大な像を粉々に砕きます。そしてそれらはみな吹き飛んで跡形もなくなり、像を打った石が大きな山となって全地を覆いました。ダニエルは44節以降で、これは天の神による国だと言います。その解き明かしの部分である44～45節：「この王たちの時代に、天の神は一つの国を起こされます。その国は永遠に滅ぼされることがなく、その国はほかの民に渡されず、反対にこれらの国々をことごとく打ち砕いて、滅ぼし尽くします。しかし、この国は永遠に続きます。それは、一つの石が人手によらずに山から切り出され、その石が鉄と青銅と粘土と銀と金を打ち砕いたのを、あなたをご覧になったとおりです。大いなる神が、これから後に起こることを王に告げられたのです。その夢は正夢で、その意味も確かです。」つまりバビロンの後、様々な国が現れ、一時は隆盛を極めてもやがては衰退するという歴史を繰り返す。しかもその質は下がって行く。そういうただ中でついに神の国が現れて、その国こそ永遠に続くものであるということです。そういう神の国が終わりの日に現れ、確立するということです。

このダニエルの言葉をヨハネの黙示録1章1節は受けています。ダニエル書で、神の国は終わりの日に起こるべきこととして言われていましたが、それがここでは「すぐ起こるべきこと」と言われています。そしてこれと関連するのは3節後半の「時が近づいているからである」という表現です。この表現で思い起こす御言葉は何でしょうか。そ

これはイエス様が宣教を開始された時の第一声、「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコ 1 章 15 節) でしょう。ご存知の通り、この「神の国は近くなった」というイエス様の言葉は、神の国は近くまで来たが、まだここには来ていないという意味ではありません。その意味は神の国は現にここに臨み始めたということです。最終的完成はまだですが、神の国はここに実現し始めた。そのようにヨハネがここで言っていることも、ダニエル書が終わりの日に起こると述べていた神の国は今やここに実現し始めている！ということです。これは聖書全体のメッセージとも一致します。ペテロは使徒の働き 2 章のペンテコステの説教で「終わりの日にわたしはすべての人にわたしの霊を注ぐ」というヨエル書の預言が今ここに成就したと言いました。またヨハネの手紙第一 2 章 18 節に「今が終わりの時」とあります。ですからこのヨハネの黙示録は、いわゆる世の終わり直前のことだけを語っている書ではないのです。これは聖書が言う「終わりの日」、すなわちイエス・キリストの初臨から再臨までの全期間に関わる言葉であって、1 世紀のクリスチャンにも、今日の 21 世紀の私たちにも関わる言葉なのです。ネブカドネツアル王が見た夢で、人手によらずに切り出された石が巨大な像を打ち砕いたとありましたが、あの人手によらずに切り出された石とはイエス・キリストを指しています。その方が地上に現れて、十字架、復活、そして神の右の座に昇天したことによって、旧約聖書が予告して来た神の国、神のご支配は始まっているというのが聖書全体のメッセージです。

ですから 2 節では、この書の内容が「神のことばとイエス・キリストの証し」と言われています。これは一つ目の「神のことば」を言い換えると、二つ目の「イエス・キリストの証し」になるという意味だと思われます。「イエス・キリストの証し」とは、「イエス・キリストご自身が証した事」とも取れますし、また「イエス・キリストを証した事」とすることもできます。いずれにしてもポイントは「神がキリストを通してなされた事」ということです。その事についての神のメッセージ、幻をヨハネは見たのです。神はキリストを通して何をなされたのか。その結果、世界は今どんな状態にあるのか。神はこの世界をどう導いておられるのか。さらにこれからどう導かれるのか。その事についての神のことば、神のメッセージをヨハネは幻を通して受け、それをこの書で証しし、私たちに取り次いでいるのです。

そういう意味である学者は、このヨハネの黙示録は神がキリストにおいてなされた事についての天のコメンタリー、天の解説書だと言いました。神はキリストの地上の生

涯、十字架、復活、昇天において何をなさったのか、それは聖書が言うこの「終わりの時代」に生きる私たちに何を意味しているのか。それを天の視点で私たちに教えてくれる天からの注解書であると。確かにそれは神から教えてもらわなければ私たちには分かりません。ただ人間のこの世的な目で世界と歴史を見つめるだけでは決して分からないことです。その神の視点を私たちはこのヨハネの黙示録を通して持つ者とさせていただけるのです。

この黙示録が書かれた当時の状況については次回見たいと思いますが、一言で言えば迫害の中にありました。イエス様を救い主と信じていても困難なことは沢山ありました。そんな中で世と調子を合わせるようにというプレッシャーのただ中に教会はありました。神の国の価値観で生きるよりは、この世の価値観で生きようとする誘惑、一言で言えばこの世と妥協する誘惑がありました。ただ自分の目で、地上的な視点のみで生きようとするれば、そうなりがちでしょう。しかしそんな中、ここに天からのコメントがあります。神の視点によれば、神がキリストにおいてなさったみわざのゆえに、今や歴史は最終段階にあります。終わりの日はすでに始まっています。いよいよその完成に向かう最終プロセスの中にあります。そういう現在は、神の視点によればどのような時代であり、また今の真の主権者は誰であって、その方はどのように働いておられるのか。このことを悟って天の視点で生きるように！とこの書は与えられました。神のみわざを賛美しながら、いよいよ先に置かれている神の国の最終的完成・最終的勝利を見つめて歩むためです。

最後3節に、この黙示録を読むことへの招きが語られています。ここに「この預言の言葉を朗読する者は幸い」と書かれています。これは当時、聖書は教会で、礼拝において、公的に読まれたことを背景にした言葉です。この部分を受けて今日の説教題は「黙示録を読む幸い」としました。すなわちこの黙示録から逃げてはならないということです。この書から遠ざかってはならない。もしそうしたら、ここで宣言されている幸いにはあずかれません。これほど読むことが幸いだ！と言われている書は他にありません。ですから私たちは怖気づかず、敬遠せずに、これに耳を傾けるべきです。そして真にこれを読むこと、また聞くことは、そこで言われていることを守る生活へと至らなければなりません。この書は単に将来の出来事について予言した、私たちの知的好奇心を満たすためのものではないのです。これは天の視点を持ち、神がキリストにあってこの世界をどう導いておられるかを悟り、その主の御心を受け止めて、主に従う生活へと進むた

めのものです。そのことはこの黙示録の最後でも強調されています。22章6～7節：「御使いは私に言った。「これらのことばは真実であり、信頼できます。」預言者たちに霊を授ける神である主は、御使いを遣わして、すぐに起こるべきことをしもべたちに示された。「見よ、わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを守る者は幸いである。」ここに改めてこの書のテーマは「すぐに起こるべきこと」だと言われています。1章1節と同じです。そして7節に「この書の預言のことばを守る者は幸いである」と改めて言われています。神がキリストにおいてしてくださったみわざについて天的な視点を与えられ、この時代の意義を悟り、命じられている主の御心に従う歩み。その幸いへとヨハネの黙示録は私たちを招いています。私たちはこの励ましを受けて、この黙示録を読むことにチャレンジし、このことばに聞いて行きたいと思います。そしてこれに従って生きる者に約束されている「幸い」にあずかることへ導かれて行きたいと思います。